

## [030] 語文研究表紙奥付等

<http://hdl.handle.net/2324/10239>

---

出版情報：語文研究. 30, 1971-03-31. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



## 編集後記

わたくしは、ただいま卒業会(?)に出席して帰ったばかりである。本年度も、卒業式というものは、大学全体のも文学部のも、行なわれなかった。卒業会は、当初ビールパーティーに始まり、やがてそれぞれの研究室に引きとつて、主任の先生から学位記や卒業証書を渡され、折詰め弁当を食べて、雑談の後、思い思いに退散するという至極簡便質実なものであった。ふだんと違うのは、卒業生諸君が和洋の装いも花やかに、文字通り晴着姿であったことであろうか。然しセレモニーとしての行事は全くなかったのである。

この是非の論はさておき、これは、いわゆる学園紛争を契機に大学側がやむを得ずとつた方式であるが、案外と恒久化しそうな気配さえ感じられる。それにしても、最少限十六年間の学校生活に終止符をうつには、余りにあっさりしていて、お粗末に過ぎるのではないかと、晴着姿の諸君に対して、ちよつと申訳けないような気持ちにもなった。尤も、教育は終生のものという観点に立てば、それ程

気にしないでもよいものかも知れない。思えば、これら諸君の在学中、大学は内外において揺れに揺れ、荒れに荒れ、その余波は、ほんの二三日前まで続いていた。お蔭で、わが国語国文学科でも二十七名という未曾有の多人数が巣立ち、中には教育資格のないままに社会に出るような人などもあって、最後が最後まで異常な事態が続いた。しかし苦難を克服して、ともかく卒業の栄冠を得られたことは、めでたい限りであり、御多幸を祈つて止まない。

みぎのような情況下、本誌(三十号)を予定通り発刊し、遅れをとりにどせたことを悦ぶと共に、御寄稿の各位に厚く御礼申し上げる。学問の道は、終生ためみないものであることを、ここでも痛感させられた。ただ、本誌発行責任者、つまり九大国語国文学会会長として多年お骨折りにいただいた中村幸彦教授がこの三月を限り九大を去られるのは、惜しみて余りあることであつて、その寂寥感は一回覆うべくもない。去る三月二十一日には会員および有志相集まつて、送別壮行の会を催した。御在任中、先生の残された数々の業績や薫陶は、一々述べるも愚かであつて、殊に、ここ二三年間は、学内の運営にも御尽力であつた。その御苦労に対して、公私ともに酬いることの余りに少ないことを嘆くばかりであるが、今はただ、先生の今後の御発展と、相も変らぬ御指導とを希つて止まない。本誌も、次号を中村幸彦教授記念号(三一・三二号合併)として発刊することになり、その大綱をこのほど決定した。御期待を乞う次第である。(三月二十七日 春日記す)